

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370163

研究課題名(和文) 脱肉体化時代の美学的考察

研究課題名(英文) Sensuous Thought in the Age of Decorporalization

研究代表者

越智 和弘(Ochi, Kazuhiro)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：60121381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：資本主義が20世紀に示した兆候が、労働の均質化により脱肉体化した人間関係を生み出すことにある、という本研究に先立つ科研費から得られた結論をもとに、本研究においては「脱肉体化時代の官能的思索」をテーマに、毎年2篇ずつ計6篇の論文を発表した。また国際企画『フルッセルアーナ』(ヴィレム・フルッサー辞典)への執筆を依頼され、日本人として唯一その執筆者に加わったことも、研究の大きな成果だといえる。本研究は、レベッカ・ホルンが作品化する脱肉体化が生む「人間不在の美学」と、ロボットが人間の知能を超える時代における人間のあるべき姿を追求したヴィレム・フルッサーの思想が相互補完的に結びつくことを解明した。

研究成果の概要(英文)：As a succeeding study of the conclusion achieved through the foregoing study, which stated that the most obvious character of capitalism in the 20. century could be observed in the homogenization and decorporalization of the human sex, six essays on the theme “Sensuous Thought in the Age of Decorporalization” were published. Also as a fruitful result of the study, the main researcher was asked to take part in writing an article as the only Japanese in the international project “Flusseriana” (encyclopedia on Vilem Flusser), which was successfully published in August 2016 from the University of Minnesota Press. This study as a whole made clear that the art works of Rebecca Horn which circles around the aesthetic of absence in the world of decorporalization and the philosophy of Vilem Flusser which is targeted on the human possibility in the age of AI overriding the human intelligence are compensationally related.

研究分野：人文学

 キーワード：形象文字と線形文字 線形的思考と円環的思考 文字的思考と数値的思考 homo faberとhomo ludens
人工知能と遊びの可能性 歴史の円環的再構成

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景には、現在われわれの生きる地球を支配する、西欧主導型の価値観は、そもそもいつ生まれ、なぜその価値観が普遍性をもつようになったのか、という基本的な疑問があった。この疑問を解明すべく取り組んだのが、平成 23～25 年度の基盤研究(C)「性の解放と資本主義-労働力の均質化をめぐる表象文化論的考察」であった。この研究の成果として、つぎの二つの点が明らかになった。それは、一つには、われわれの生きる世界を基調づける基本的な価値や考え方、すなわち、個人やその自由や平等、神に代わる科学的合理主義への信頼、民主主義、そして資本主義などが、16 世紀初頭にドイツを震源に起きたキリスト教的な神との距離の大きな修正にあったことが判明した。それが宗教改革と呼ばれるものであったことは言うまでもない。研究は、神との関係の厳格化が近代を生んだという、パラドックスな事実を踏まえ、とりわけそこから生まれた「労働」の概念、そして人間の労働を基盤に生まれた資本主義を支えてきた精神 = スピリットの発展史をたどることを課題とした。そこから判明したのは、理性に基づく自由も平等原則も、ありとあらゆるものを資本の原理に取り込むこと、すなわち商品交換価値へと転換するための方便でしかなかったことが判明した。ただそうしたなかで、商品価値に変換するうえでもっとも困難を要したのが性とその担い手とみなされた女性であった。

ここから、前述した先行する科研費研究から、ふたつ目の重要な事実が判明する。それは、20 世紀の半ば近くになって若者の反抗運動として顕在化した性の解放運動がもった真の意味である。それは、当の若者たちの意図とは裏腹に、それまで資本の世界に取り込むこと極めて困難を極めた性と女性の官能的世界を、従来のようにタブー視し禁じるのではなく、逆に解放してしまうことによって

無害化し、それによって商品価値への転換を可能ならしめる、という巧妙な戦略であった。この時代以降、もはや性やその守り手としてあった女性の特性は、「解放」と「平等化」の名のもとに男性的な資本の世界に動員されてしまう。

本研究は、資本の精神が、それが生まれた 16 世紀から 20 世紀にいたるまで、まるでプログラムされていたかのごとく展開してきた事実、そしてそれによって、性の官能性という最後の砦までもがあからさまな光に曝され無害な商品と化した現代という社会的背景を踏まえ、性をめぐる人間性の可能性を、哲学と芸術の両面から探ることを課題として掲げた。

2. 研究の目的

前述の通り本研究は、平成 23～25 年度の基盤研究(C)「性の解放と資本主義-労働力の均質化をめぐる表象文化論的考察」の成果を継承し、そこから生まれた新たな課題の究明を目的とした。従前の研究においては、1960 年代という時代の画期性を浮き彫りにするため、女性のパフォーマンス・アートに着目し、その西欧近代史の枠内における必然性を解明し、性の解放運動が起きた 20 世紀後半期を、近代資本主義の重大な転換期と位置づけた。

しかし研究を進める中から、性と女性の解放に主体的に取り組んだはずの若者の行動が、じつは解放の名のもとに、長きにわたり西欧人を束縛してきた性的悦楽への罪責感を取り除くことで、人類全体を資本に動員しうる道を開いたと同時に、人間の肉体を商品の対象へと転換するうえで不可欠となる肉体がもつ神秘性の消去 = 脱肉体化に貢献したという意識が強まった。本研究は、官能性とその担い手とみなされた女性が本来もっていた資本を機能不全に陥れかねない要素、すなわち商品価値に転換しえない領域が、性の解放運動を経た 20 世紀後半期以降には、

すでに非在化されてしまったという仮定のもと、現代における、哲学と芸術美学が人間のもつ官能性を復活させる可能性を解明することを研究の目的と定めた。

3. 研究の方法

研究の哲学面の柱をなしたのは、西欧の近代化を「悪魔の歴史」とみなし、アウシュヴィッツは西欧近代の理性と合理主義が完璧に機能したが故に実現したのだと言い切ったドイツ語圏の哲学者ヴィレム・フルッサーであった。そして、フルッサーの提唱する歴史的直線的思考からの離脱と形象的、円環的思考の復活を芸術面から実証して見せたドイツの芸術家レベッカ・ホルンの、北ドイツの都市ミュンスターに設置したインスタレーションが、芸術面での研究の柱をなすことになった。

よって研究の方法は、ベルリン芸術大学に設置された「ヴィレム・フルッサー・アルヒーフ」における資料収集と、ミュンスター市のツヴィンガー牢獄に設置されたホルンのインスタレーション『反時計回りのコンサート』の現地調査を並行しておこなうというかたちをとった。幸い上記両機関の責任者から全面的な協力を得られたため、1年目、2年目の研究は計画通りに進められ、予想を上回る成果が得られた。そのため、3年にわたり計画された本研究の最終年度においては、国内作業と国外作業の目的を明確に絞ったうえで、研究の集大成を図った。具体的には、国内作業としてフルッサー・アルヒーフで収集した膨大な資料を基に、フルッサー思想がもつ独創性を、ビットを古典的な「形象」として分類したうえで、コンピューターが人類にもたらす可能性を、一方では線形文字に支配されてきた近代の歴史的指向から逃れうるものとして積極的に評価したことに見いだした。しかし同時に、人工知能が席卷する未来に人類がロボットの奴隷と化す運命を避けるためには、人類の「労働」から「遊び」へのパラダイム転換が喫緊の課題だとするフルッサー

が提唱する内容をテーマに、2本の論文を執筆しそれを刊行した。

国外作業としては、フルッサーが示した、歴史的直線的思考から解き放たれる可能性を秘めた形象による円環的思考を、芸術面で実践してみせた場として、ミュンスター市にあるレベッカ・ホルンのインスタレーション『反時計回りのコンサート』に焦点を絞り、ツヴィンガー牢獄に設置されたこの芸術作品の数奇な成り立ちと、複数回に渡り現場に立つ機会が得られたことで体験しえた円環思考を、そこに「投企」された日本人の立場から記述することに専念した。具体的には、廃墟の状態で保たれたツヴィンガー牢獄の渦巻き状の薄暗い通路を反時計回りに歩くなかで、いたるところから聞こえてくる小さなハンマーが壁を叩く音が、まさにホルンが意図した、訪れるものの思考を、20世紀に起きたゲシュタポによる拷問から、17世紀の再洗礼派の処刑、18世紀の刑務所での懲罰行為等へと、「円環的」に飛び回らせる格好の舞台装置として作用することを体験しえたことが他に代えがたい意味をもった。その経験から、哲学的思索と芸術作品の密着した記述という、新たな研究課題が見いだせた。

4. 研究成果

資本主義が20世紀に示した兆候が、労働の均質化により脱肉体化した人間関係を生み出すことにある、という本研究に先立つ科研費から得られた結論をもとに、本研究においては「脱肉体化時代の官能的思索」をテーマに、毎年2篇ずつ計6篇の論文を発表した。またヴィレム・フルッサー・アルヒーフの国際企画『フルッセルリアーナ』（ヴィレム・フルッサー辞典）への執筆を依頼され、日本人として唯一その執筆者に加わったことも、研究の大きな成果だといえる。本研究は、レベッカ・ホルンが作品化する脱肉体化が生む「人間不在の美学」と、近い将来訪れることが予想さ

れるシンギュラリティ、すなわちロボットの知能が人間の能力をあらゆる面で超える時代に、人間にはいかなる可能性が残されるかを追求したヴィレム・フルッサーの思想が相互補完的に結びつくことを解明した。

3年計画で進めてきた本研究は、今年度をもってひとまず完結した。ベルリン芸術大学のヴィレム・フルッサー・アーカイヴとミュンスター市立美術館から、厚意ある協力を終始得られたおかげで、研究には当初の予想を大きく上回る進展がみられた。今後は、少なくとも現段階では、日本でほかに所持しているものはないと思われるヴィレム・フルッサーに関する膨大な資料、ならびにツヴィンガー牢獄をめぐる歴史的資料の整理に専念し、その成果を出版し、学会等で順次発表していくことに努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

越智和弘、脱肉体化時代の官能的思索 - ヴィレム・フルッサー論考(6)、言語文化論集(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、Vol. 38、No. 2、2017、pp.117-132、<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/38-2/38-2.html>

越智和弘、脱肉体化時代の官能的思索 - ヴィレム・フルッサー論考(5)、言語文化論集(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、Vol. 38、No. 1、2016、pp. 97-111、<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/38-1/38-1.html>

越智和弘、脱肉体化時代の官能的思索 - ヴィレム・フルッサー論考(4)、言語文化論集(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、Vol. 37、No. 2、2016、pp. 33-48、<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/37-2/37-2.html>

越智和弘、脱肉体化時代の官能的思索 - ヴィレム・フルッサー論考(3)、言語文化論集(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、Vol. 37、No. 1、2015、pp. 15-30、

Kazuhiro Ochi、Vampyroteuthis in der desexualisierten Welt - Studie zu Vilém Flusser (1)、Vol. 36 No. 2、2015、pp. 23-45、<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/36-2/36-2.html>

越智和弘、脱肉体化時代の官能的思索 - ヴィレム・フルッサー論考(1)、言語文化論集(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、Vol. 36、No. 1、2014、pp. 15-30、<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/36-1/36-1.html>

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

Kazuhiro Ochi, u.a., University of Minnesota Press, Flusseriana, 2015, pp.360-361

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

越智 和弘 (OCHI, Kazuhiro)
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：60121381

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()